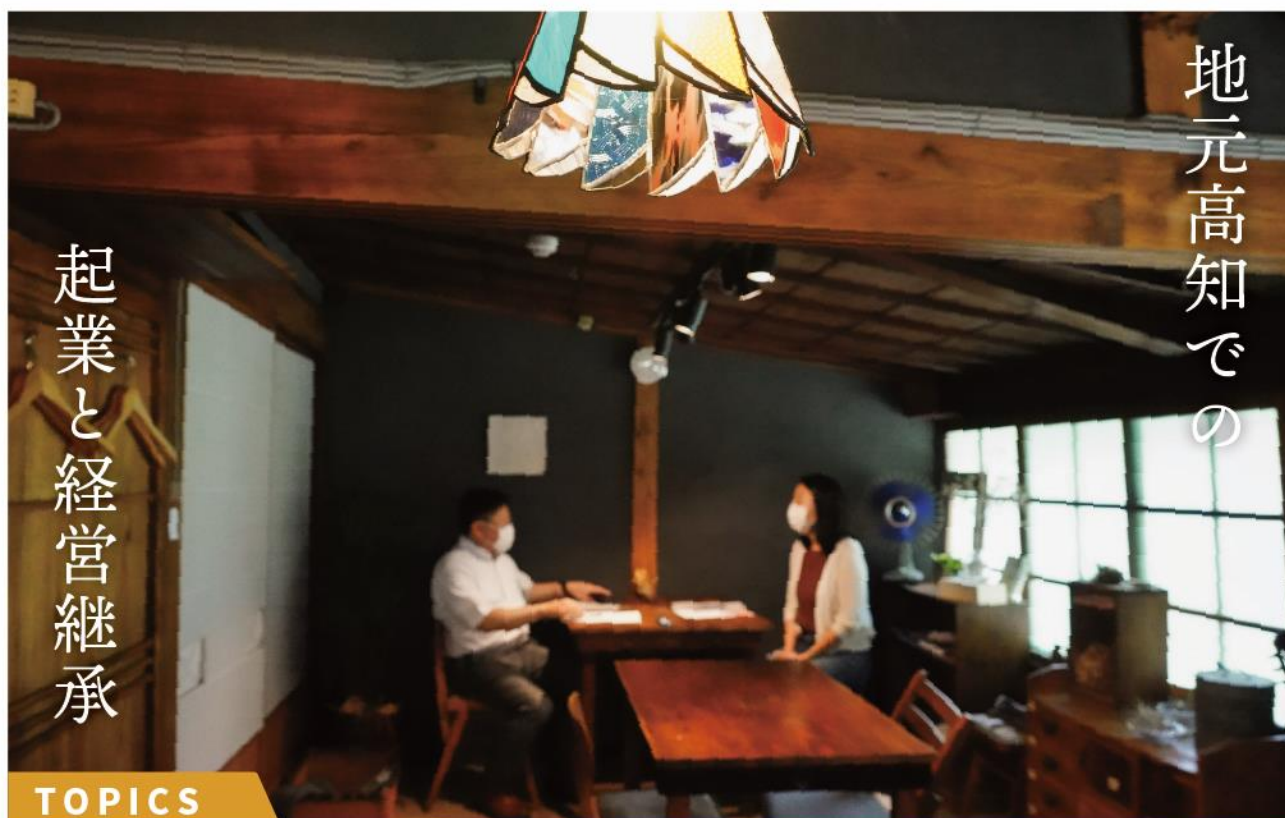


二人のUターン経営者に聞く
なぜ「生まれ故郷での経営」なのか



起業と経営継承

地元高知での

TOPICS

不全感を乗り越え、より上位の目標を見据える

Hostel 東風ノ家 (Kochi-no-ya) 仙頭 杏美

哲学が心に「沁みる」ようになってきた四代目

株式会社四国ポンプセンター代表取締役 西村 修一

interviewer



〈土佐経営塾プログラムディレクター/
副担当講師〉

竹内 伸一

(名古屋商科大学大学院 教授)



〈土佐経営塾主担当講師〉

田村 樹志雄

(タクティス 〈経営支援サービス〉代表)

Case 1

不全感を乗り越え、 より上位の目標を見据える

10期生(2019年修了) Hostel 東風ノ家 (Kochi-no-ya)

仙頭 杏美



室戸を起点に高知県東部の近代産業の発展史に深く関わってきた多田家は、二代目耕太郎氏の代で安芸市に移り住んだ。今日私たちは、耕太郎氏の子である健二郎氏夫妻の住まいとして昭和12年に建てられた邸宅におじゃましている。この屋敷には、伝統的な日本建築様式と現代建築様式が混ざり合い、約180坪の敷地内には本館と離れ、そして3つの庭がある。ここは現在、「東風ノ家」(こちのや)と名付けられたゲストハウスとして、安芸の街の一角に確かな存在感を放ち続けている。

このゲストハウスの主人は仙頭杏美さん。彼女は土佐経営塾10期の修了生で、塾を修了した翌年2020年9月に「東風ノ家」を開業した。昔から地域のコミュニティ拠点だった多田邸の役割を、時間を超えてそのまま引き継ぎ、旅人と地元の人が集い、交流し、新しいことが生まれるきっかけの場を作ろうとしている。



を過ごしている。そこには、地域活動がとりわけ活発な安芸市民らしい親子像がうかがえる。

子ども時代の夢は、最初はお母様と同じ保育士で、次に看護師も考えたが、次第に海外に強い関心をもつようになり、中学から始まる英語の授業を心待ちにした。やがて興味の矛先はメディアに向かい、東京の大学の社会学部に進学する。ここで履修した「新聞研究」の授業の先生が高知新聞社でのインターンシップを紹介してくれたことで、彼女のその先のキャリアに小さからぬインパクトが及ぶ。

◆ 就職、そして不全感

よさこい祭りの裏方や、JAの首都圏向け野菜出荷など高知新聞社での取材経験は、表に出にくい高知の魅力や人々の気概を、仙頭さんに再認識させた。「高知をもっと伝えたい」。メディアについて学ぶために上京した仙頭さんだったが、この時点での当面の目標は「高知の魅力を高知から伝える仕事」に据えられていく。

かくして大学卒業とともに高知に戻った仙頭さんは、広告デザインの会社に入社し、希望通りの仕事に8年従事。その後、ワーキングホリデーを使って海外生活も経験。帰国後は、室戸ジオパーク推進協議会の国際交流専門員、県内食材の地産外商に取り組むベンチャー企業でも働いた。



◆ 児童会長からメディア研究へ

仙頭さんは、消防士のお父様と保育士のお母様の長女として安芸市に生まれ、のびのびと育てられた。学校では児童会長、生徒会長を務める典型的なリーダー女子であり、子ども会活動にも積極的に参加した。ご両親が清掃活動やさまざまな集会、地区民運動会などの地域活動に熱心に参加していた影響も受け、地域との接点の多い子ども時代

現在もフリーペーパー「K+」に寄稿している



しかし、キャリアを重ねれば重ねるほど、どうしても拭えない疑問が芽生え、膨らんでいく。「自分は本当にそうしたいのか」。それは、事業者として独立しない限りは決して拭えない不全感だった。仙頭さんにとって、この「不全感」を拭うということはすなわち、仕事の主体を、さらに言えば人生の主体を「自分に取り戻す」ということに他ならなかった。結局彼女は、主体を取り戻せたら取り戻せたで、その先も決して楽ではない第二幕に進んでいく。



第二幕では誰も彼女に給料をくれない。すべてが自己責任だ。さあ何をやるか。仙頭さんは少しずつ温めてきたゲストハウス経営に、その出口を見つけた。そうと決まれば「まずは修行」と、ゲストハウス「ルルル」に住み込みで1年間働いた。かくして、国内外の外来者が集まる場所、高知の魅力の発信拠点、地元と外来者の交流拠点、などの役割を兼ね備えたゲストハウスの運営価値を改めて確信した仙頭さんは、経営の独立に向けて大きく踏み出していく。

◆ 経営感覚のシャワーと先輩の言葉

起業に向けて動き出そうとしたときに、彼女の周囲のゲストハウス起業者の中に、土佐経営塾の修了生が二人いた。一人はすでに本誌第一号でも紹介した8期生で「とまり木」オーナーの篠田善典さん、もう一人は同じ8期生で宇佐の「宇楽家」オーナーの増井翔子さん。

ちょうどこの頃に開業して間もない二人だった。両氏が仙頭さんに助言した中身の話も耳にしたが、先輩後輩の関係はいいものである。

仙頭さんは経営塾に参加して、経営者の考え方の数々を、経営を始める前に学べたことが収穫だったと言う。「私自身は企画畑で育ったので、事業とは創造して発信していくものと考えがち。資金繰りや収益化を通して、事業それ自体を発展させていく財務的発想には乏しかった。でも、経営塾でそのことに気づき、経営者としての弱点の補強ができた」と。こうした経営感覚のシャワーを、経営塾の内容からも、机を並べた仲間からも、たくさん浴びてくれたことが嬉しい。また、経営塾の先輩修了生が後輩受講生の起業を支援し、勇気づけてくれていることも嬉しかった。



コロナ禍で開業した仙頭さんは、平時の需要に支えられた安定経営をまだ経験していない。しかし、私は仙頭さんをあまり心配していない。それは、彼女には「故郷への恩返し」という、より上位の目標があるからだ。上位目標を持つ人は芯が強く、そして柔軟でもある。今日、久しぶりに仙頭杏美さんに会って感じたのは、そんなことだった。

(文：竹内伸一)



interview

Hostel 東風ノ家 (Kochi-no-ya)

〒784-0001 高知県安芸市矢ノ丸 1-9-28

TEL：070-4141-1004

Case 2



哲学が心に「沁みる」 ようになってきた 四代目

5期生(2014年修了) 株式会社四国ポンプセンター代表取締役

西村 修一

5期生の西村修一さんは、現在、株式会社四国ポンプセンターの社長を務めている。四国ポンプセンターは、比較的小規模な汎用ポンプから治水等の官公需向けの大型ポンプまでを扱い、高知の市中に流れて溜まる水のケアを支援している。戦争中に軍属であったおじい様が高知に戻り、市民の生活や生命の維持に直結するポンプ事業に着目して同社を創業。そこからお父様と叔父様を経て修一さんへと経営のたすきが渡り、彼は四代目社長である。



案の定、修一さんはこの時代の男子大学生の定番的な学生生活を送った。要するに、女の子とバイトとクルマに夢中で、大学には必要最低限しか行かなかった。そのことについて彼は、「大学では勉強しなかったが、そういう過去があったからこそ、今になってまずまず意欲的に学ぶようになったわけで、後悔などしていない」と正当化している。

◆「弟が言うのだから」

そんな西村さんが土佐経営塾に現れたのは、彼が高知に戻って7年後のことで、営業主任として入社した四国ポンプセンターでの役職は専務取締役、年齢は40歳になっていた。土佐経営塾では、入塾に際して講師が志願者全員と

◆ひしひしと感じるもの

創業家の長男は生まれながらにして、後継者としての宿命を大なり小なり背負っている。修一さんもそのことを折に触れてひしひしと感じながら育った。男三人兄弟の長兄たる修一さんは家の中で、長男である自分には決して許されなかったことが、弟たちには問題なく許されていくことに不思議な感情を覚えた。それでも、「兄貴はたいへんそうだ」という弟さんたちの視線に支えられ、長男の役割を前向きにまっとうする少年だった。

高校では弓道部に所属し、「あと一本」というところでインターハイ出場を逃すという悔しい思いもしたが、それ以上に異性に目覚めた。高校を卒業すると、お父様同様に東京の大学に進学。進んだ学部は経営情報学部だった。



面談するが、そのとき西村さんは「弟に勧められた」と強調していた。一方こちらは、経営大学院に来るような社会人学生とばかり接しているせいか、身内の勧めという理由には、やや拍子抜けしていた。本人の考え、本人の弁として語らせようとさまざまに試みたが、結局「弟が言うのだから」に戻る。たしかに、その前年に経営塾に参加した西村家の末弟西村太助さん（当時は高知銀行に勤務、後に慶應義塾大学ビジネススクールに進学して経営学の修士号（MBA）を取得）は優秀な人で、講師のアシスタントも務めてもらったほどだ。その彼が強く勧めているということで、そこに「何があるか」はよく分からないが、「何かがある」と確信したのだろう。それはそれでいいかと私は西村修一さんを経営塾に招いた。この判断は正しかった。



◆ 経営者が学ぶべき二つのこと

修一さんは結果的に、経営塾をとっても気に入ってくれた。その理由について、彼はこんな説明をしてくれている。「経営に関わる人間が学ぶべきものは二つあるように思う。ひとつは資格試験勉強のようなもの。勉強しないと資格が得られず、それがなければ何も始まらないというようなもの。これはどんなに辛くても、学ばないといけない。もうひとつは、例えばよくないかもしれないが、仏教の禅問答のようなこと。土佐経営塾にはそんな場面が多かった。テクニックを学ぶのもいいのだけれど、そういうものではなくて、ケースに突き付けられた問題を受け止めて、悩みに悩んで、やっとのことで自分の思いを吐き出すと、仲間や先生が何か返してくれる。それを聞いてまた悩む。自分は禅問答がしたくて参加したわけではなかったが、こういう時間に浸れたことがよかった」のだと。

西村さんは二つめの学びのことを「哲学」という言葉で総括した。私に言わせれば、哲学とは学問の名称であり、その目的を平たく言えば「ものごとを考え直すこと」である。



「咄嗟に思いついたこと」よりも「深く考え直されたこと」のほうが、いざというときに当てになりそうだという皮膚感覚は多くの人が持っているだろう。しかし、私たちの学びはどうしても、明日からすぐに使えて、使いやすく手にも入れやすい道具の獲得に向かおうとする。また、いま使っている道具は、せっかく使っているのだからそれでよしとして、その道具を前提から疑ってみたり、その使い方を深く考え直すことなどは稀であろう。

今回の取材を終えてのひとつの安堵は、私たちが土佐経営塾に埋め込んだ哲学的な要素が、経営継承という宿命を背負った人物に「沁み」てくれたということだ。西村さんと私の付き合いも長くなってきたが、彼が「こういうのが沁みる」とときどき呟くところが、経営者としての西村さんへの信頼を下支えしているような気がしている。

誤解のないように書くが、もちろん経営を学ぶための塾なので、何も禅問答ばかりしているわけではない。しかし、経営塾では確かに、知識やスキルばかり詰め込もうともしていない。読者の皆さんもぜひ、ココブラのサイトにアップされている「土佐経営塾」の授業シラバスから、経営哲学の薫りも感じ取ってほしい。

（文：竹内伸一）



interview

株式会社四国ポンプセンター
高知県高知市農人町 2-5 西村ビル
TEL：088-882-9031

2022年度 (株)四国ポンプセンターグループ
安全大会





ぼれ話



土佐経営塾 11 期生
有限会社マエダテント
代表取締役

中山 陽介

私は高知市内で 50 年余り続くテント屋の 3 代目として 2011 年に家業を継ぐべく帰高しました。全く畑違いからの転身でしたので当初はひたすら現場に出て仕事を覚えるところから始まり、社長となつてからも両親の知識と経験に助けられながら何とか目先の案件をこなすのに精一杯な日々が過ぎました。

家族経営の温かさやルーズさが相半ばする昭和然としたアナログな社風に危機感を抱きながらも、経営者として何も出来ていない、経営的な視点や能力も不足しているという問題意識から、2020 年に 11 期生として土佐経営塾に参加させていただきました。

皆さんも経験されたとおり、特に財務面と正面から向き合えるようになったことは私にとって大きな収穫でした。

また我々の期はコロナ禍で従来どおりの集合・対面での講義形式が取れない中、最終回を除き全て「Zoom」によるオンライン授業となりましたが、「Slack」によるオンライン上のワークスペースでの資料共有・課題提出やグループ討議という手法も含め、場所にとられない現代的なワークスタイルを期せずして経験できたことは本業でも役立っています。グループ課題の取り組みも専らオンライン上ということで、やりづらさを感じる面もありましたが、宿毛市・梶原町・大川村...といった遠隔地からでも参加できる、仕事・家事・育児を終えた夜遅くからでも集まって話ができるという環境は、学びやビジネスの可能性を広げてくれると身をもって感じました。

とは言え土佐人として授業後の懇親会までもがオンラインだったことには寂しさもあり、引き続きのコロナ禍ですが、また同期の面々や竹内先生・田村先生と酒食を酌み交わす日を心待ちにして、社業発展に勤しむ毎日です。

土佐経営塾を支える人

高知県産業振興推進部産学官民連携課
人材育成支援担当 岡林 なおみ



今年度の土佐経営塾を担当します岡林です。県庁ではこれまで観光の仕事をしておりました。

熱意ある土佐経営塾のみなさんと一緒にできることをうれしく思っております。どうぞよろしくお祈りします。

土佐経営塾 本年度の募集が始まりました

【期間】2022年10月23日～
2023年1月29日(全11回)

【説明会】
現地開催(ココブラ): 2022年8月27日(土) 13:30～15:00
オンライン(Zoom): 2022年9月6日(火) 19:30～21:00

【面接】2022年10月2日(日)、10月3日(月)
場所:高知県産学官民連携センター「ココブラ」

【申込先】
土佐 MBA 運営事務局
☎: 088-803-4005
Mail: tosamba@shift-plus.jp
URL: https://www.kocopla.jp/tosamba/course_detail.html?course_id=31



column

編集後記



田村 樹志雄

問題対応力を考えさせられる寓話

皆さんは、「カモメになったペンギン」という本をお読みになったことがあるでしょうか?ネタバレにならない程度にあらすじを紹介すると、本書は、南極の氷山の一角に集団で住むペンギンの1羽が氷山の崩壊を予見するとことから始まります。その危機を、老若男女が集まるペンギン集団にどのように伝え、どのような対応を組織的にとっていくのか、ハラハラどきどきストーリーが続きます。著者は、ハーバード・ビジネススクールで教鞭をとる

ジョン・P・コッター氏。本書は、寓話として表現されており、さらっと読むこともできますが、私たちの身近な場面で発生する問題に、個人や組織としてどのように向き合い、対応していくべきなのか、考えさせられる内容になっています。

皆さんなら、本書をどのように活用されるでしょうか?

